池田自然史博物館

◆ は た き ◆

桜咲く四月頃から若葉の色濃くなる初夏にかけて、水辺を散歩している時に、水際の浅瀬で “バシャバシャ” という大きな水音を耳にして、驚いた経験があるかと思います。そんな時、大きな魚が背びれや尾びれを水面上に出し、水草の間を縫うように泳ぎながら体を震わす光景を目にすることがあります。これは、コイやゲンゴロウブナなどコイ科の大型の魚の『はたき』と呼ばれる行動です。産卵期にコイ科の魚が、産卵床となる浅瀬の水草の葉や茎などに卵を産みつける、いわゆる産卵行動で、尾びれなどで水面や水草を「はたく」ように見えることから、『はたき』と呼ばれるようになったと考えられます。

産卵に選ばれる環境は、粘着性の卵が付着できる水草が繁茂するような場所で、豊かな水際植生が存在する場所なのです。また１回の産卵において、コイで20～60万粒、フナで数万～15万粒程度の大量の卵を産みっ放しにするため、その卵の多くは他魚や底生動物のエサとしての役割を果たすことにもなります。

コイ科の産卵については、別名『乗っ込み』とも呼ばれています。冬の間、深場でじっとしていた魚が、春になって水が温むのを待って、産卵のために浅場に『乗り込んでくる』ことからそう呼ばれています。ちなみに『乗っ込み』は、コイ科の魚にだけではなく、チヌやマダイなどの海水魚の場合にも使われる言葉です。

コイやフナは、昔から人々には馴染み深い魚です。童謡にも数多く歌われ、子どもから本格的な釣り人まで釣りの対象魚としても親しまれています。今は『はたき』のシーズン、足場の良いワンドなどでは多くの釣り人で賑わっています。







産卵期を過ぎた頃には傷ついた魚をよく見かける

環境省　環境カウンセラー
NPO法人　nature works

池田　哲哉

来た・見た・聞いた 淀川雑記帳



ここ数年のマイブーム、標本づくり。捕った魚をホルマリンに浸けたり、昆虫をアクリル標本に。はたまた駆除された獣を食べて、骨格標本を作ったり…。そんなある日、仲間からバスが欲しいと言われた。理由を聞くと、透明骨格標本にして環境教育教材にするのだそう。大きな魚は食べることで供養できるが、稚魚はカメのエサなどにしていた。透明骨格標本なら、魚の体の構造を教えるのに私も使える。というわけで、淀川各地で捕った特定外来生物の稚魚を仲間に託している。透明骨格標本は使用する薬剤が高価なので、どのように提供できるか企画中であるが、近いうちにバス・ギル・カダヤシを展覧できるだろう。（編集長・石山郁慧）

川と人　人と人を結ぶ
河川レンジャー 淀川管内
VER RANGER

デザイン監修：NPO法人nature works　泉野幸彦・ありさだあきよ
イラスト監修：NPO法人nature works　小村一也
取 材 協 力 ：人を自然に近づける川いい会
発 行 支 援 ：国土交通省 淀川河川事務所

バックナンバーは、http://npo-natureworks.net/　の「無料の資料」からダウンロードできます。

淀川自然画報

2016年5月号　No.19

淀川水系の生物多様性を
見る・知る・楽しむ
生きものシグナル

YODOGAWA SHIZEN GAHO

水辺の博物誌



デンデンムシの代表選手

ナミマイマイ　*Euhadrra sandai communis*

淀川水系をはじめ、近畿地方に広く分布するカタツムリの代表格。本州中部に生息するコガネマイマイの近畿地方型で、関西ではカタツムリと言えば本種かクチベニマイマイを指します。殻の色や帯状の色帯とよばれる模様は地域によって様々ですが、螺塔（らとう ＝ 巻貝の殻のこと）が低く平たい形状、ハッキリとした色帯は、まさにデンデンムシといったイメージ。梅雨の季節、淀川河川敷や近隣の公園の紫陽花の葉にとまる姿をじっくり観察してみては？　（画 / 原素子）

発行責任者　淀川管内河川レンジャー・石山郁慧

under the water

多種多様、淡水魚たちの生態と生活史

淀川水系魚類名鑑

希少野生動植物保存推進員
横山 達也

カワアナゴ

Eleotris oxycephala



本種はスズキ目カワアナゴ科のグループに含まれています。関東より南の太平洋側に多く、国外では朝鮮半島、中国、東南アジアなどで知られています。体は通常、暗褐色をしており、とくに若魚では背側の部分が淡い灰褐色をしていますが、体色の変化が著しく、黒一色のものから全体に灰褐色のものなど、同じ個体でも生息環境などによって変化する、まさに忍者のような魚です。全長は15〜25cm 。一見すると、ハゼの仲間のように見えますが、腹びれが吸盤状になっていないことから、ハゼ科ではなく、カワアナゴ科に分けられています。





淀川の支流では
毎年、確認されている

河口付近の汽水域から純淡水域にみられますが、あまり遡上能力がないため、堰などで遡上が阻害されている河川もあります。日中は倒木や岩陰などに潜んでいて、夜間になると活動し、底性の小魚やエビなどを食べます。産卵期は夏期で、川底にある大型の石の裏側に、卵を産み、オス親が孵化するまで守ります。産まれた仔魚は海へ下り、成長して再び川へ戻ってくる両側回遊型の生活史を送ります。食用にされている地域もありますが、近年、生息数が減少傾向にあり、各地で準絶滅危惧や絶滅危惧種のカテゴリーに含まれています。

花想鳥感

四季折々、水辺の生物多様性

高槻市立自然博物館　主任学芸員
高田 みちよ

草地のキジ

キジは日本の国鳥です。なぜ国の鳥に指定されたかというと、馴染みがある、美しい、狩猟鳥である、という理由だそうです。国鳥なのに狩猟鳥？と思われるかもしれませんが、現在でもキジは狩猟が可能で、狩猟免許があれば合法的に捕ってもいい鳥なのです。

都市の日常生活でキジを見ることはありませんが、キジはいたって普通の鳥です。丈の低い草地に棲む鳥で、広い農耕地ではトコトコ歩いているのがよく見られます。淀川にも実はたくさん棲んでいます。鵜殿のヨシ焼きでは、以前は事前に刈り取らずに直接火を付けていたので、なんの前触れもなく炎にまかれたキジがたくさん飛び出し、右往左往する姿が見られました。今でもヨシの中や草むらにはキジがいるのですが、隠れ上手な彼らを見つけることは難しいです。

そこで、名言となっているのが「キジも鳴かずば撃たれまい」という言葉。ものすごく我慢強い鳥なのですぐそばを通るまで逃げることなく、あんなに派手なのに見逃すことが多いです。しかし繁殖期のオスは「ケーン」と鳴いてメスに自分をアピールするので、ハンターに見つかってしまうことから「余計なことを言って自ら災いを招く」ということわざになってしまいました。メスは茶色の鱗模様で草に隠れてしまうので、卵を抱いているメスを踏んでしまった知り合いもいるぐらい。メスは鳴かないので撃たれることはありませんが、踏まれることはあったのです。



畑の中を歩いている
オスのキジ



キジのヒナ

the waterside

the sky & land

水辺の虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

人を自然に近づける川いい会　捕獲番長 川島 大助

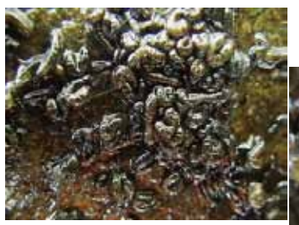
川遊びの天敵「ブユ」

5mm程度の小さなハエのような虫で、関西ではブト、関東ではブヨとも呼ばれます。川遊びやキャンプ、ハイキング中に刺されてしまい、普通の蚊に比べて大きく腫上がってしまった経験がある方も多いのではないでしょうか。この犯人は主にアシマダラブユで、幼虫〜蛹を水中で過ごす水生昆虫です。幼虫は体長7mm、体色は淡褐色半透明（頭部を除く）で、胸部と腹部末端で太く、中間がくびれ、ひょうたんを細長くした形で、腹部末端には吸盤があります。

本種は河川の中流〜上流域に生息しています。春〜秋に羽化した成虫は交尾後、水中や水際に産卵。卵は約10日で孵化し幼虫となり、平瀬や早瀬の礫の裏側に固着します。頭部に開閉可能な扇状の器官があり、流下してくる餌（有機物）を捕食し約1ヵ月で蛹になり、その後約1週間で羽化します。



成虫は右のイラストのような
姿をしている



石に張り付いた幼虫

羽化する前の蛹の状態



成虫期は短く、数日間で産卵します。春〜秋の間に複数回、世代交代しますので、通年をとおして、本種の幼虫を見ることができます。また、本種は水質指標生物でもあり、ブユはスコア値7（スコア値1〜10の10段階で10ほど清冽な水域の指標になる）、きれいな水域の指標種になります。

淀川にも生息していますが、支流の安威川、芥川、琵琶湖流入河川など郊外の渓流域でよく見かけます。平瀬や早瀬で石を取り上げて、石の裏側を観察すると、密生する幼虫や蛹を見つけることができます。ただし、幼虫がいるということは、皮膚を刺す成虫もいますので、刺されないように注意して観察してみてくださいね！

the worst 100

侵略的外来生物

淀川ワースト100



AN INVADER

ゴマノハグサ科　**オオカワヂシャ**

Veronica anagallis-aquatica

淀川管内河川レンジャー 石山 郁慧



原産地はヨーロッパ〜アジア北部、南北アメリカ、アフリカ、オーストラリア。多年草。地中を横走する根茎から茎を直立し、高さは30〜100cmである。初夏〜盛夏に小さな花を咲かせ、色は淡紫をしている。準絶滅危惧種に指定されているカワヂシャと交雑し雑種を形成するため、駆除の対象だ。在来種のカワヂシャはノコギリ状の葉である一方、オオカワヂシャはほとんど全縁に見えることで見分けられる。小さな美しい花であるが、その姿にダマされてはいけない。





人があまり入らない流入河川で玉井レンジャーと魚を捕っていたときに、彼女が見つけてくれたオオカワヂシャ。その土手の上には、特定外来生物のオオキンケイギクも咲いていた。いつのまにか日本の里山の風景が外国産に塗り替えられている。